

最初期の四国遍路のガイドブック 「四国邊路道指南」と 「四国徧禮道指南」の相違について

稲 田 道 彦

1 はじめに

眞念が記した「四国邊路道指南」という書物によって、それに至るまで長い期間に形成されてきた四国を巡る巡礼の信仰や習俗のあり方が文字としてまとまった形をなした。文字化することによって一つの宗教的な巡礼の体系として固定されたと考えている。同時にこの本はそれ以降の四国遍路の在り方をも一つの方向にしばる働きをしたと考えている。この本に至るまでの四国遍路の実態についてははなはだ不明確である。眞念以前の姿は文字に書かれたいくつかの記録の断片によって「辺地」と呼ばれる四国各地を遍歴する修行を行う僧侶が平安から鎌倉時代にいたと考えられている（梁塵秘抄、今昔物語など）。しかしその巡礼の内容については現在とは違う多様なものであったことが想像されるが、つまびらかではない。主にその活動を主導したのは修行をもっぱらにする聖や行人などの修行僧であったと想像されている。彼らの活動を支えた思想的背景には、当時の日本に様々な形で流布していた種々の宗教思想や宗教習俗が流れ込んでいたと筆者は考えている。例えば、原始神道や日本各地にあったまじないやアニミズム、庶民儀礼のような思想、渡来した仏教、さらには渡来した道教も形を変えて巡礼を行う思想の中に流れ込んだのではないかと筆者は想像している。ここで取り上げる「四国邊路道指南」の原著者の眞念も頭陀眞念（四国徧禮靈場記第7巻巻末の記述）と自称し「斗擲（四国徧禮功德記の記述）」する修行僧であった。彼の中にも当時の宗教者と同じく、いくつもの

宗教的な考えがあって、彼の行動、彼の思考を通して、彼が生きていた時代背景の中で一つの形に結実したと考える。一番大きいのは仏教を基盤とし、それも弘法大師空海を尊敬する気持ちにつき動かされている同時代の宗教者の一つの典型的な形として、形成されたと考える。きっと眞念以前の巡礼者が四国で考えたこと、四国遍路に先行して形成されていた西国三十三観音巡礼や、日本全国を巡る六十六部回国巡礼などの宗教的考えの影響を受けながら集大成されたと考える。その時代意識として形成されてきた四国遍路の思想を眞念という僧侶が代表となり文字に記した。

この「四国邊路道指南」が四国遍路研究において重要な位置を占めていることは多くの研究者が指摘し、これまでにいくつもの研究がある。

まず近藤喜博（1974）著「四国霊場記集別冊」をあげることができる。この本の体裁は写真による実物の提示と、現代仮名遣い文の書き下し文、そして巻末の解説となっている。テキストになった書籍は赤木文庫本と紹介されている。赤木文庫は蔵書家、横山重氏（1896-1980）のコレクションである。横山氏は貴重本を探し出し、校本を出版することを多くなした学者といわれている。浄瑠璃本のコレクションは大阪大学図書館、中世稀覯本が慶応大学図書館に買い取られ、現在所蔵されているが、ここに収録されているテキスト「四国邊路道指南」が現在どこにあるのか、所在を探したが筆者には不明であった。原本の発行年は貞享丁卯冬十一月宥弁眞念謹白という年号の書かれた「四国邊路道指南」の最後の頁によって示される文言により出版年を特定している。

この近藤喜博（1974）「四国霊場記集別冊」には、その次に同じく写真複写の「四国徧禮道指南増補大成」が載せられている。この原本は明和四年に出版され、岩村武勇氏の所蔵になる本と記されている。また解説の文中に岩村氏所蔵の上記の本とは別の「四国邊路道指南」の写真頁が出てくる。岩村氏は多くの「四国邊路道指南」をお持ちで、岩村氏所蔵の赤木文庫本「四国邊路道指南」の異本があったことは確かであるが、岩村氏所蔵の本の現在の所在も筆者には知ることができなかった。

また伊予史談会（1981）も「四国遍路記集」を出版し、簡単に見ることので

きなかった江戸時代の四国遍路の文献の書き下し文による文献集を出版している。この中に「四国邊路道指南」も納められている。ここに納められたテキストの所蔵先は明らかにされていないが、赤木文庫本とはほぼ同じ内容を示している。

さて本論文の目的であるが、古書店から筆者が入手した「四国徧禮道指南」が同じ貞享四年の発行年月を記しながら、まったく体裁が違う書物となっている。同じ出版年である「四国邊路道指南」の異本が存在することを巡って当時の出版事情も考慮しながら、2つの本の間の中で、眞念の記述が揺れ動く様子を考えながら、草創期の四国遍路道指南で、どのようにそれまでの四国遍路の習俗が固定されていくのかを考察してみたいと考えている。

2 「四国邊路道指南」と「四国徧禮道指南」

両者のどこが違うかといえば、同じ貞享四年の発行年の記述を持ちながら、まず本の体裁が大きく違っている。一方は1頁を6行で構成し、もう一方は1頁を8行で構成している。以降、近藤喜博著「四国靈場記集別冊」に掲載された6行本を赤木文庫本と呼ぶことにする。今回比較対象とするもう一方の、8行本を稲田本と呼ぶことにする。最初に気づくのが、両者の書名が違っていることである。題箋は共に失われているが、内題に書かれた、最も基本的であると考えられる遍路の文字が違っている。赤木文庫本が現在多く使われる「四国遍路」の旧字の「邊路」と「邊路」を用いるのに対し、もう一方の稲田本は「徧禮」を「へんろ」の名として採用している（文中には邊路も使っているが）。読み方はふりがなにより「へんろ」（例えば稲田本57丁裏の徧禮のルビ）と読んだものと思われる。両方の本に刊記はないのであるのが、最終頁に書かれた年号どおりに解釈すれば、同じ年にまったく違う2種類の版木を用意し、印刷し、製本して出版したと考えられる。本の内容は後述するように大部分の記述において同じである。江戸時代において四国遍路に関する書籍がこのように短期間に相次いで2種類の類似書が出版されるであろうか、という疑問に突き当たる。

どちらかの本が最初に出版され、それを受けて原稿の訂正がなされ、版木用に清書され、そして彫刻して版木が作られ、刷り師により印刷され、製本されて第2の本が出版されたと考えるのが穏当であろう。洪卓によって書かれた前書きの部分で、出版に際しては、野口氏木屋半右衛門の浄財を受けて出版することができたと記している。当初は篤志家の援助を受けて出版にこぎつけることができた出版物である。

3 6行本「四国邊路道指南」の異本について

近藤喜博氏は「四国霊場記集別冊」の解説の部分で、6行本には未見の初版本が存在し、さらに当書に紹介した赤木文庫本のほかに岩村武勇氏の所蔵する異本があることを紹介している。赤木文庫本について、近藤喜博氏は『赤木文庫本は題簽と紺色裏表紙を欠き、本文第十九丁に一葉の欠丁がある(507p)』、未見の初版本を加えて3種類の6行本が存在することを挙げられているが、岩村コレクションも所在がわからず、その内容は近藤喜博氏の紹介文と何枚か示された頁の写真で知るしかない。赤木文庫コレクションと岩村コレクションの「四国邊路道指南」本では赤木文庫本が古いと判定されている。その理由として『岩村本には補刻・改訂補刻・追刻といった箇所が随所に見られ』る、と記している。

6行本に関しては、筆者の調査によると、もう一冊、瀬戸内海歴史民俗資料館に蔵書される一冊がある。赤木文庫本とも相違する点がある。この本はあまり改変が加えられていなくて、本として出版当時の姿を多くとどめている。

4 8行本の「四国徧禮道指南」の異本について

一方8行本はここでは稲田本と称するが、稲田本と、まったく同じテキストが香川県さぬき市前山おへんろ交流サロンに所蔵されている。ただしおへんろ交流サロンの本は新しい表紙に付け替えられ、綴じ直されている。さらに東北大学図書館に所蔵される8行本の「四国徧禮道指南」(狩野文庫)は、稲田本に対して、1枚の版木において記述の内容が変更されている類似本である。8

行本については稲田本と東北大学本の2種類の異本が存在することを確認している。また早稲田大学図書館にも8行本が所蔵されている。最初の数頁と最後の裏表紙が欠損しており、途中で欠損のため手書きで加えられた頁もあるが、これらの点を除けば早稲田大学本は稲田本と酷似している。詳細な比較はできていないが、稲田本と同本である可能性が高いと考えている。

近藤喜博氏は8行本についてその存在をご存じで、以下のように解説されている(522 p)。『四国徧禮道指南(別版本)、版本1冊、タテ15.8 cm、ヨコ11.1 cm、貞享四年版による改篇本。縹色表紙、見返し真如親王式弘法大師御影。因みに『道指南』による道しるべは諸版一貫して御影を巻首に、序に遍路姿を掲げている』と述べられ、ついで本の構成である丁符の記述に移り、序に続いて、第七丁表から本文で、最後の丁符が百丁とすると述べている。そして実枚数が赤木文庫本より49枚減じていることより、赤木文庫本に比べて内容が省略されていると述べている。この本は「四国邊路道指南」の改編省略の改刻本であるとしている。この点については六行と八行の行数の相違に触れていないことより、内容が減じているかどうか、本論文で論じるところである。

5 赤木文庫本と稲田本の相違点

まず表紙と、本の綴じ方に関する丁符について最初に述べる。本章では主に赤木文庫本(6行本)と稲田本(8行本)の比較を行う。まず本の体裁の点から述べる。表紙に関しては、赤木文庫本より、出版当時の本の形式が残っている、瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵の6行本と稲田本の8行本とを比較する。瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵本の表紙の色は紺色であり、表紙の大きさはタテ15.6 cm×ヨコ10.6 cmである。一方稲田本は表紙の色は縹色^{はなだ}である。大きさは15.3 cm×10.9 cmである。ほぼ同じサイズの本であるといってもよい。厚さは瀬戸内海歴史民俗資料館の本の方がかなり厚い。西洋本の頁にあたる丁符が赤木文庫本で序の部分と本論にあたる部分が別順の丁符がつけられ、序と本論が同じ一丁から始まるのに対し、稲田本では全編が一から始まる通しの丁符となっている。

そして、稲田本では最初の頁に二丁と書かれた紙が綴じられ、次に一丁がきている。内容から判断すると綴じ間違いである。同じく稲田本では五丁と六丁は五六丁という符号で一枚になっている。同じく廿九卅丁が一枚にすられている。同様に四六四七丁も一枚になっている。六三六四丁も同様である。で最後の丁符が百丁である。全部で96枚の紙片が綴じ込まれている。本論では一枚の紙に刷られた頁の表記を一丁右、一丁左という表記ではなく、一丁表、一丁裏という表記で一丁の頁の前後を示すことにする。

すでに述べたように稲田本では1番から順に丁符がつけられているが、赤木文庫本では序の部分と本論の部分で丁符の数字が分けられている。赤木文庫本の書誌学上の特徴を喜代吉榮徳氏の論文を引用する形であげる。『三丁左まで高野山奥院護摩堂の本樹軒主洪卓による序があり続いて、眞念著の旅の総論が九丁右まで続く。前書きは又九丁左までで、前書きの最後に遍路の絵と版木屋の名前が載る。続いて本篇が四国遍路道指南全という内題のもとに、一丁から始まる』。一方稲田本は通し番号で最初から一連の丁番号がつけられている。赤木文庫本の特徴として、又〇丁という形で同じ数字が重ねられる箇所がある。又〇丁があるのは、九丁、三六丁、五四丁、五九丁、八六丁、百八丁、の6枚の版本分である。一九丁表には2行分のスペースに小さい字による3行が追加され一頁が7行となる。埋め木により版が改められることを想像する。このことを近藤喜博氏は赤木文庫本へと改変する前の初版本があったことを推測する理由の一つにしている。赤木文庫本の又〇丁という丁符の付け方は当時の出版において異常なことなのかどうか、現在の筆者にはよくわからないところであるが、近藤喜博氏は又〇丁が付け加える前の初版本があったと考えられている。ただし文を、順を追って読んでいく読者には又〇丁がないと意味が不明になる。これを補うためには近藤喜博氏の考える初版本は前後を含めて文の書き換えられたテキストが存在することになる。又〇丁が付け加えられた事情は当時の出版の事情からしてどういうプロセスから生じたのか、これも知りたいところである。

赤木文庫本の又〇丁という丁符について、筆者の想像を述べる。全体に何か

所か仮の丁符を決めて、版を作る作業を同時並行的に進めたのではないかと想像した。全体ができあがった時点で、丁符が合わなくなりそれが又〇丁という丁符を作るにつながったのではないかと筆者は想像する。近藤氏は最初にできあがった初版があり、改版を作る段階で又〇丁の丁符になったと考えておられる。丁符の数字だけであれば埋木等で簡単に修正できるのではないかという反論もすぐ浮かぶのであるが。江戸時代の和本の出版事情を調べるうちに筆者にもわかってくる問題であると考えている。

8行で書く稲田本の書誌的特徴をあげると、前にも述べたように最初が二丁表から始まる。文の通りからすると、二丁と一丁との綴じ間違いとなっている。赤木文庫本にある又〇丁という紙片はない。赤木文庫本とは逆に稲田本では、一つの紙に2丁分の丁符をもつ丁符がある。五六丁、廿九卅丁、四十六七丁、六十三四丁、の版木4枚分である。これらは赤木文庫本では全て挿絵が入れている頁に当たる。当初挿絵の版を作る予定で丁符の番号を割り当てていたものを、後で挿絵を作成しない決定をしたため、丁符の数字を重ねたのではないかと筆者は想像する。省略された絵は、赤木文庫本で6人いる巡礼のうち荷を担ぐ巡礼を含む3人の巡礼の絵、母川で大師が女より慈悲水を授けられる図、横浪三里を船で渡る遍路の図、三坂峠より松山城下を見下ろす図である。しかし挿図は最初の3人の遍路の図が1頁分であることを除いて、残りが2頁に当たるため、これが1丁分の版木にあたり、削除しやすかったのではないかと想像する。

綴じ方に関して、丁符は一六・一七と順番通りに綴じられているが、文章の内容は逆に一七・一六の順番になっている丁がある。版木の丁符のつけ間違いである。これは東北大本（狩野文庫）も同じようになっている。丁符の付け方の初歩的な間違いであるといえる。東北大本（狩野文庫）とは、七丁の版木の一部をどちらかが修正している。現時点ではどちらがオリジナルな形であったかを想像できない。

では以下の表1に赤木文庫本と稲田本の内容の違いを示す。

表1 赤木文庫本と稲田本の相違点

番号	赤木文庫本	丁	稲田本	丁
1	四国邊路道指南序	1丁表	四国徧禮道指南序	1丁表
2	^{ハルカ} 沓に人家なくして	1丁表	^{ハルカ} 沓に人家なふして	1丁表
3	四国徧禮靈場記全部四卷	4丁裏	四国徧禮靈場記全部七卷	3丁表
4	此道しるべの中には納め取りことの外,	4丁裏	此道しるべの中には ^{オガミシヨ} 拜所ことの外,	3丁表
5	記載なし	5丁表	道ののりもいひつたえのまゝ、遠きもちかきも有	3丁表
6	奉納四國中邊路同行二人	5丁裏	徧禮四國中靈場同行二人	3丁裏
7	一 此道指南并靈場記うけらるべき所ハ △大坂心齋橋北久太郎町本屋平兵衛△同所江戸堀阿波屋勘右衛門△阿州徳島新町信濃屋理右衛門△讃州丸亀塩飽町鍋屋伊兵衛△豫州宇和島満願寺 此満願寺八十八ヶの中にはあらずといへども、大師草創の梵宮にて、往昔は大伽藍なりしが、破壊年久しく尽るになんんとす。今出す所の靈場記、道しるべ両通の料物をあつめ、彼寺九牛が一毛修理せむ事、それがし惣天の別願なり。南無大師遍照金剛 眞念敬白	8丁表	此本の中に宿ほどこす衆書付たる所少々これ有是ハ某数度徧禮の時日くれ宿なき時ハ難儀に及びしにより心ざしの人をすゝめ諸徧礼にもかくあらんと書付し處より人により定かたる宿のやうに心なし衆も有へけれども宿にも用事差合の節ハ徧禮の人料簡て有事も 一 両所への渡海男衞人女衞人のりあひふ成男女共ニ衞人もふ成候	5・6丁表
8	仏像文字共 大坂久太郎町 心齋橋筋版木屋 五郎右衛門刊之 并邊路札有	又9丁裏	表記場所の移動（遍路札の書き方に続いて書かれている）	3丁裏
9	江戸堀阿波屋勘左衛門方	1丁表	堂嶋玉江橋阿波屋勘左衛門方	7丁表
10	白銀式匁	1丁表	銀式匁	7丁表
11	記載なし	1丁表	大坂より下り徧礼宿徳嶋内町魚棚橋屋一右衛門	7丁表
12	同所より讃劔丸亀へ渡海ハ	1丁裏	同所より讃劔丸亀志度高松へ渡海ハ	7丁表
13	立売堀丸亀屋又右衛門同籐右衛門	1丁裏	北堀江老丁目田嶋屋伝兵衛	7丁表
14	右ハ大坂より両所へ渡海の次第但し他国よりハ其所々にて渡海の次第可相尋	1丁裏	右ハ大坂より両所へ渡海の次第宗旨手形ハ証明の人あれハ生玉新藏院ないださる禮物ハいらず	7丁裏
15	次第なり	2丁表	次第と云傳 ^{イワル}	7丁裏
16	○西をゑ村	12丁裏	○をゑ村	15丁表
17	しでやさんづのなんじよありなば	14丁裏	しでやさんづのなんじよありとも	17丁裏
18	記述なし	15丁裏	ぜんじやう有	16丁表
19	○ひの野村	15丁裏	○ひろ野村	16丁表
20	記載なし	16丁裏	おくのいん有	16丁裏
21	とろやぶといふ竹	21丁表	くろやぶといふ竹	21丁表
22	西のすまひ	21丁裏	西のすまる	21丁裏
23	たてえ村石橋八つ、	21丁裏	たてえ村石橋九つ、	21丁裏
24	三角のいわほ有	23丁表	三角のいはかあり	22丁表

25	くわんじやうの瀧又ハ不動のたき 共いふ	25丁裏	くわんじやうの瀧又ハ不動の滝と もいふ	23丁裏
26	○たなご村	27丁裏	○たなの村	24丁裏
27	ししん文殊ハ守護	29丁表	しやしんもんぢハ守護	25丁裏
28	○だい村とまごえ坂○き、浦清右 衛門宿をかす	31丁表	○たい村とまごえ坂○き、浦清右 衛門宿を○す	26丁裏
29	八坂々中八はま々中あり	32丁裏	八坂々中八はまはま中あり	28丁表
30	行基ほさちさばといふ	33丁裏	行基ほさつさばといふ	28丁表
31	女の申けるハ尤陽月	37丁表	女の申けるハ光陽月	31丁裏
32	幸に今日わがは、きゞ	37丁表	幸に今日わがは、きミ	31丁裏
33	此間に小坂有	39丁表	此間に坂有	32丁裏
34	○さきのはまうらの手	39丁裏	○さきのはまうらのね	33丁表
35	○きらかわ村	45丁表	○きらかハ村	36丁裏
36	たとひ有とも	46丁表	たとひありとも	37丁表
37	○いは松村。松本村	50丁表	○いは松村松本村	39丁表
38	○にしもろき村。山はなにしろし 石、次に川わたり瀬、所の人にた つねらるべし、大水のときハ河上 に舟わたしあり	55丁裏	○にしもろき村次川有	43丁裏
39	たつミ村あがわ郡秋山村	56丁表	タツミ村あがわ郡	43丁裏
40	記載なし	56丁表	本尊画像 座四尺六寸 本尊薬師 漢上人作	44丁表
41	是より清瀧寺迄（本来青龍寺）	57丁裏	是より清瀧寺迄（本来青龍寺）	45丁表
42	記載なし	57丁裏	○宇佐坂	45丁表
43	○つかち村○うさ村	58丁表	○つかち村○宇佐坂○うさ村	45丁表
44	あわれをハあふかん	60丁表	あわれをハいかにあふかん	46・47丁裏
45	国主造営の宮朱門彩風景もよし	61丁裏	国守造営の宮朱門彩瓦景もよし	48丁表
46	其外こころざしある人有	63丁表	其外志ある人有	49丁表
47	東向幡多郡ミやうち村	63丁裏	東向高岡郡ミやうち村	49丁裏
48	此在所惣ミやう仁井田村	63丁裏	此在所惣名仁井田村	49丁裏
49	○ふばわら村	65丁表	○ふはすら村	50丁裏
50	塩干の時ハ	66丁表	汐干の時ハ	51丁表
51	ミチ塩の時ハ	66丁表	ミチ汐の時ハ	51丁表
52	月さんかける時ハ荷物もち行	67丁表	月さんへかける時ハ荷物もち行此 月山はあしずり方九里有、本尊三 ヶ月なりの石、いはれ有たく御堂 なし。あしずり方この間の道中、 シミづうら入海渡し有。ましの浦 のびわばこいし。ミさきのうち。 たゑまといふ所に田つくしのいそ べとて。ごんごにつきせぬ。けい き岩くく目をおどろかす所也。お 月よりてら山迄七里半此間ひめの ゐ村庄屋兵衛並に村中より諸邊 路のためすぐ道をつける又あらせ に霊げんの地藏まします。	51丁裏 52丁表

53	この庵にて尋らるへし	67丁裏	眞念庵にて尋らるへし	52丁表
54	〇くも、村山道〇おつき村此間海邊行、過山路〇いぶり村	68丁表	〇くも、村山道〇おかき村此間海邊行、過山路〇いぶり村	52丁裏
55	是より寺山迄十二里	69丁表	是より寺山迄十三里	53丁表
56	但大水の時左よし、ゑの村川有、	69丁裏	但大水の時ハ左へ、つねハゑの村川有、	53丁裏
57	まひる我身をたすけまませ	70丁表	まハる我身をたすけまませ	54丁表
58	びりようかしま	71丁表	ひりやうかしま	54丁裏
59	さ、山越かんじさい方	73丁裏	さ、山越親自在方	56丁表
60	カノ 彼寺をしゆりせん事眞念願 序のごとし	76丁表	カノ 彼寺をしゆりせん事眞念願	57丁裏
61	カノ 彼寺をしゆりせん事眞念願序のごとし△四国徧禮靈場記 四卷△四国邊路道しるべ 全	76丁表	カノ 彼寺をしゆりせん事眞念願△四国徧禮靈場記△四国邊路道しるべ 全	57丁裏
62	むた村	77丁裏	むでん村	58丁裏
63	あけいし寺迄三里、	79丁表	明石寺迄三里、	59丁表
64	〇下村町。〇わかミヤ村	80丁表	次二ばい人町。〇わかミヤ村	60丁裏
65	其人のよめるとて歌ににたる事有	82丁表	其人のよめるとて	61丁表
66	〇梅津村薬師堂	82丁裏	〇梅津村薬師堂かひのくにしふ白五左衛門こんりう庄屋喜三宿かす	61丁裏
67	調物自由也	93丁表	橋本屋与三右宿かし、おぐら屋作右、邊路屋有	61丁裏
68	此間峯の堂坂峠	84丁表	此間たうのミね坂峠	62丁裏
69	〇はた野川すみよし大明神	84丁表	〇はた野川住吉大明神	62丁裏
70	〇ゆかの村	85丁裏	〇ゆこの村	63・64丁表
71	駿河の山のおとし、ごゝ嶋しま山	86丁表	駿河の山のおとし、ず嶋しま山	63・64丁裏
72	出船つり船やれく扱先たばこ一ふくで	86丁裏	出船つり船邊路のうきををはたす	63・64丁裏
73	堂ハ此村の長右衛門こんりうして	又86丁裏	堂ハ此村の長右衛門建立して	63・64丁裏
74	うくるくはうくハむくひならまし	87丁裏	うくるくはらくハむくひならまし	65丁裏
75	一 繁多寺平地西向温泉郡	90丁裏	一 五十々繁多寺平地西向温泉郡	67丁表
76	万こそはんた成ともをこたらず	91丁表	よろつこそはんたなりともをこたらず	67丁裏
77	石手寺うしろ山東向温泉郡石手村	91丁表	石手寺後山東向温泉郡石手村	67丁裏
78	西方をよそとは見まじ安養の	91丁裏	西方をよそとは見まじ安寿の	67丁裏
79	河野の古城湯月となつく	92丁表	河野の古城湯月とりつく	68丁表
80	第四ハやうじやう湯とて男女へだてなく	93丁表	第四ハ養生湯とて男女へだてなく	69丁表
81	ゆげたのうた	94丁裏	井けたのうた	69丁表
82	爰町	94丁表	爰に町	69丁裏
83	〇是より延命寺迄九里ほり江村過て〇あはる坂やなぎはら村、町有〇ほうてう村	97丁表	村〇大谷村長右衛門宿かす〇あはる坂〇かのミて村三右衛門宿かす〇柳はら村村過てあはる坂〇柳はら村町有〇ほうてう村町中	71丁表

84	行てたちミ坂○たね村○さがた村 小川沢町有	98丁表	行てたちは坂○たね村○さがた村 小川次町有	71丁裏
85	○ながさか村	103丁表	○ながさ八村	75丁表
86	今ハ大明神がはうより右へ	103丁裏	今ハ大明神河原より右へ	75丁裏
87	縦横にミねや	105丁表	たてよこにミねや	76丁裏
88	いしつち山の前札所鉄(てつ)の とり有	105丁表	いしつち山のくろかミのとり有	76丁裏
89	ぜんぢやうする事なし。それ故、 前神寺という	105丁裏	ぜんぢやうする事なし	76丁裏
90	小まつの町	107丁表	小まつの町城下二有	77丁裏
91	これきちじやうをのそミいのれよ	107丁裏	ミなきちじやうをのそミいのれよ	78丁表
92	だんといふ所	108丁表	たんといふ所	78丁表
93	○小ばやし村	109丁裏	○小林村与三右衛門宿かす	79丁裏
94	○くぢやう村与右衛門宿かす	109丁裏	○くでう村与右衛門宿かす	79丁裏
95	○大師堂有○なかの庄村○中そね 村	109丁裏	○利兵衛宿かす大師堂有中そね村	79丁裏
96	かしは村○たきのミヤ村	109丁裏	○たきのミヤ村	79丁裏
97	○よこをお村三角迄坂,	110丁表	○よこをお村三角迄坂, 中曾根村 今村孫兵衛庭中に奇石あり新寶と 名づく禪宗南山隻の詠有	80丁表
98	おそろしや三ツの角にも入ならハ	110丁裏	おそろしや三の角にも入ならハ	80丁表
99	是方雲邊寺まで五里, 右二十ヶ所 豫州分	110丁裏	是方雲邊寺まで五里, 右二十六ヶ 所伊豫分	80丁裏
100	極楽はよもみもあらし此寺の	11丁表	極楽はよもにもあらし此寺の	80丁裏
101	しけきをおそれりやくす也	111丁表	しけきをおそれ略す	81丁表
102	過て一昼村, それより平山村へ出 る。(過ぎてのルビに大くぼと書く)	111丁裏	過て大久保, 一昼村, それより平 山へ出る。	81丁表
103	寺の下方左へ行○今川村○内野、 村,	111丁裏	寺の下方左へ行○金川村○内野、 村,	81丁表
104	○はんた村くはん音堂○りやうけ 村	111丁裏	○はんた村観音堂○りやうけ村	81丁表
105	○ねきのお村ゆきて坂有	112丁表	○ねきのお村太左衛門宿かす坂有	81丁表
106	是方雲邊寺迄二里阿州の分	112丁表	是方雲邊寺迄二里阿弼	81丁裏
107	記載なし	112丁裏	○坂中二御作ノ泉有	81丁裏
108	月日をいまはふもとにぞ見る	112丁裏	月日をいまはふもとけにぞ見る	81丁裏
109	此間のら○辻村文右衛門九十郎や どかす	113丁裏	此間野原○辻村文右衛門九十郎八 右衛門宿借ス	82丁表
110	琴引き迄さか	114丁裏	琴引き迄坂三町	83丁表
111	○よしをか村	116丁裏	○よしをか村過て川有, 本山村	84丁表
112	景気もよし然とも邊路宿ふ自由な り	116丁裏	景風もよし然とも邊路宿ふ自由な り	84丁裏
113	記載なし	117丁表	おくのいん有	84丁裏
114	○大見村大師堂	117丁裏	○大見村大師堂太良衛門宿かす	85丁表
115	○上吉田村○下吉田村	123丁表	○善通寺直に行ハ上吉田村○下吉 田村○金倉寺村	88丁裏

116	しゅうとく天皇迄一里半〇うたつ町	126丁表	崇徳天皇迄一里半〇うたつ村	90丁表
117	塩釜ありなみ松、野沢の水霊水、	126丁表	塩釜あり並松、野沢の水霊水、	90丁表
118	記載なし	126丁裏	正面ハちんじゆひたり札所	90丁裏
119	国分村	127丁裏	国分村此所に平四郎忠三郎宿かし	91丁表
120	谷川有	128丁表	谷川有、平四郎忠三郎宿かす	91丁裏
121	一宮迄二里半しるし石有	122丁表	一宮迄二里半標石有	93丁裏
122	八十四々やしま寺山上堂はミナミ むきやまだ郡やしま	124丁裏	八十四々屋嶋寺山上堂ハ南向八幡 郡八嶋	94丁表
123	やくり寺迄一里有	125丁裏	薬師寺迄一里有	95丁表
124	古の五輪塔も有。後小松の御宇、 崇徳元年四月五日に、奥州より佐 藤氏族のしゃもん空信、此はか詣 来て、回向のまことをつくし、いた はしや君の命をつきのふか印の石 は苔ころもきて、とよまれけれハ、 そとは動揺して、をしむともよも 今迄ハながらへじ、身をすて、こ そ名をハ次信と、はかの中にこゑ しけるよし、屋島軍ゑんきに見え たり、それより先帝女院幸行の内 裏の跡有。此の所を壇となつて	126丁表 126丁裏	古の五輪塔も有。なつて	95丁裏
125	とそつの浄土そのま、月	129丁裏	とそつの浄土そのま、の月	97丁表
126	あし曳の山鳥のをの長尾枕（ルビ にてら）	142丁表	あし曳の山鳥のをの長尾てら	97丁裏
127	経坂ともいふ。	142丁裏	経座ともいふ。	98丁表
128	四箇国総（すべて）八十八箇内二 十三箇所 阿州道法五十七里半三 町四十八町一里 同一十六箇所 土州道法九十一里半五十町一里 同二十六箇所 予州道法百十九里 半三十六町一里 同二十三箇所 讃岐道法三十六里五町三十六町一 里道〇都三百四里半 大師御辺路 の道法は四百八十八里といひつた ふ。往古は横堂のこりなくおがミ めぐり給ひ、險阻をしのぎ、谷ふ かきくづ屋まで乞食と乞食に乞食 なさせたまひしが	143丁表 143丁裏 144丁表	四箇国総（すべて）八十八箇 谷 ふかきくづ屋迄乞食なさせたまひ しが	99丁表
129	高納いにしへに徘徊し	143丁裏	高納いにしへに徘徊し	99丁裏
130	某 甲其流に浴する年年久し	144丁裏	某卑其流に浴する年年久し	100丁表
131	巡礼かざたびして一まくりの反古 を懐く	145丁表	巡礼かざたびして一まくりの反語 を懐く	100丁表
132	さがなき道法	145丁表	さがなき道のり	100丁裏
133	梓工備銀喜捨 大坂西浜町野口氏 木屋半右衛門 本願主全所寺島 宥弁眞念房 本出ス所 大坂北久 太郎町心齋橋筋 本屋平兵衛	146丁表 146丁裏	記載なし	裏表紙丁表

134	記載なし		裏表紙丁表 阿波徳嶋迄渡海 四ツ橋すみや町 油屋善左衛門 同町阿波屋十兵衛 右阿波屋勘左衛門、日前二切手出 シ申候 讃岐へ渡海ノ時ハ北堀江 壱丁目田嶋屋伊兵衛ヲ切手出シ申 候 貞享の版磨滅して文字ふ分明 たりより今後梓をあらたむるもの 也
-----	------	--	---

6 赤木文庫本と稲田本と相違点に関する考察

相違点は表1から幾つかのトピックを取り上げながら、表中の番号を示しながら表現の変化を述べることにする。ただしこの表の中では相違点としてとりあげているが、表記上の言葉遣いや漢字表記の相違点はよくある変更として大きな意味を持たないと考えている。

① 赤木文庫本と稲田本の新旧について

先に引用したように近藤喜博氏は赤木文庫本が古くて8行本(例えば稲田本)は新しい改編省略の改刻本であるという。以下の点で新旧に関しては近藤喜博氏の主張が正しいと考える。表1の番号3の記述では、四国徧禮靈場記が全巻4巻と7巻の相違がある。「四国徧禮靈場記」は4年後の元禄二(1689)年に出版される。正しくは7冊の本として出版される。この記述の差は「四国徧禮靈場記」が出版計画されていた時点と、出版された後の時点の違いなのではないかと考える。故に正しい数字を掲げる稲田本が新しいと考える。次に前にも述べた、挿図に関する丁符の付け方の問題で、最初あった絵の版木を削除したため五六丁、廿九卅丁、四十六七丁、六十三四丁、の1枚で2枚分の丁符をもつ稲田本の紙片が生まれたと考える。文字で埋められた版木の創作に比べて絵の版木を作ることは労力や資金がいったのではないかと想像する。最初にあった図が省かれた丁符となった稲田本の方が後に作られたと考える。また丁符の付け方も最初から通し番号で進めることができたのも現物を前にした修正であったから、より容易だったのではないかと考える。

では後年出版されたと考える稲田本が、なぜ同じ貞享四年の出版年を用いたのであろうか。この貞享四年は弘法大師八百五十年遠忌に当たる（近藤 497 p）メモリアルイヤーであった。四国遍路に弘法大師の巡礼の姿を重ねて考えたい気持ちを持つ眞念、洪卓らにとってこの年号は重要であったと考える。それゆえ後年の出版であっても貞享四年の出版の年を用いたかったと考える。またこの年を提示されて、読者には弘法大師没後、850年経過した年の意味が人々に分かっていた時代背景があると考え。その点ではまだ貞享四年が弘法大師の八百五十年遠忌であることの記憶や興奮が人々に残っている時代に、この改版された8行本が出版されたのではないかと想像する。現代の私たちの感覚では5年もするとメモリアルイヤーは忘れられるように考えるが、この時代であっても弘法大師ご遠忌から10年以内くらいの出版ではないかと想像する。

近藤氏は「四国霊場記集別冊」（524 p）に『この別冊本は元禄十年の手鑑本の存在も考えて、貞享四年から三十年位後かとも推測してみる。しかし正確には把握出来ない。ただこの別版本巻末識語によって、貞享版道指南（改訂増補版もふくめて）が道俗の遍路たちに長期に利用されていた事情を知ると共に、その反面解釈として四国に出かける遍路の意外に大量であったと推測してをいた。』と書かれている。筆者は上に書いた理由と、この本の作成には眞念の意思が隔々まで及んでいる（後述）という理由で、近藤氏よりは早い時期の改版を想像している。

② 遍路の呼称「遍路」と「徧禮」、そして遍路札について

現在私たちにとって使い慣れた文字の遍路が稲田本では「徧禮」と書かれている（番号1）。文中のふりがなより「へんろ」とよばれていたことは確かなのであろうが、あてられる漢字が違っている。徧禮と書くには、雲石堂寂本の所見が大きな比重を占めていたとの近藤氏の指摘がある（507 p）。字面から信仰の高揚を心がけたのがこの字を用いた理由であるとしている。徧の意味は、あまねし、広く行き渡っている。あまねくへめぐるのに対し、遍はあまねし、始めから終わりまでや、すみずみまでの意を持つ。遍と徧は同じと諸橋轍次「新

漢和辞典」は表記している。路が道やてづる，方法を意味するのに対し，禮は人のふみ行うべきのり，心の中に敬意を抱いてそれを行動として外に表すみちという意味や，国家社会の秩序を維持する組織やおきてという意味をあげている。寂本は「へんろ」にあちこちとどこまでも広く道を行く人というよりも，すみずみまで人の行うべきのりを求める人としての「へんろ」を想定し，徧禮の漢字で表現しようとしたのであろうか。この後に眞念が関わって出版する書物においても「徧禮」の文字が「へんろ」を表す表現として使われる。眞念も徧禮に傾倒したのであれば，徧禮の文字の中に遍路の行うべき修行を見たのかもしれない。徧禮が一般的な表記として採用されずに現代では最初の遍路の字に復帰している。このあたりの経緯もいつ頃からどのようにして最初の眞念の表記に戻っていくのか今後の考察となると考えられる。

番号6では遍路の持つ「遍路札」の書き方が違っている。赤木文庫本が「奉納四國中邊路同行二人」であるのに対し，稲田本は「徧禮四國中靈場同行二人」となっている。邊路の字の書き方を徧禮に変えたことに伴い四国の靈場を回ることを意識した表現である。しかし一方で眞念においてさえ，遍路札の書き方がまだ定まっていなかったのかという驚きはある。

現代の私たちが持つ多くの遍路札は「奉納八十八ヶ所靈場順拝同行二人」であることを考えれば，私たちの遍路札の言葉の並び方は赤木文庫本の書き方にやや近いような気がする。

③ 大坂の人名の相違と航路

序の部分で遍路の心構えを説き，遍路の全体を解説している。その中で遍路を支える人，また大坂で遍路の世話をする人が二つの本で違っている。表の番号7，8，9，13，14，133，134である。7ではこの「四国邊路道指南」を受けとることのできる所が，赤木文庫本で列挙されている。8では版木屋五郎右衛門の名が一頁の中央に書かれているが，稲田本では三丁裏の末尾に遍路札の書き方に続けて書かれている。その代わりに，同じ箇所には，眞念が遍路のために宿を開拓したことを記している。また14では生玉新蔵院が宗旨手形を

作ってくれることを示している。宗旨手形がどのように遍路の巡礼に使われたのかはよく分からないが、必要であったことは確かである。逆に言うと大坂まで来る道中では宗旨手形は必要なかったとも読むことができる。

133では巻末に当たり、出版の費用を寄付してくれた木屋半右衛門の名前をあげているが、稲田本では省略されている。稲田本の134に書かれている地名と人名は船宿であろうか。明確には書かれていないが、赤木文庫本は番号7に書かれた各所で配布され、稲田本ではそのことは全く空白になっている。稲田本は販売されていたのではないかという相違が想像がなされる。木屋半右衛門の善意により出版にこぎ着けた「四国邊路道指南」が販売されたのか、希望者に頒布したのかという点についても考える必要がある。両方の「道指南」の文中にこの代金で宇和島近くの満願寺を復興したいという希望を眞念が述べていることより、赤木文庫本も代金を徴収していた可能性も考えられる。稲田本の最後に貞享の版が摩滅して読みづらくなっているのに、新しい版木の作成を宣言している。これらの本がよく売れたことを示している。134の中の一語を本論文では今後と読んだが、近藤喜博氏は今復と読んでいる。新しい版を作成するのが、今後なのか、今なのかという稲田本の出版の時期の判定にも及ぶ議論である。

10, 11, 12は大坂から阿波と讃岐に渡る航路の変化を示している。讃岐については上陸地が丸亀である赤木文庫本と、丸亀志度高松が上陸地である稲田本の相違がある。四国へ渡る遍路の多くは金比羅参詣の船に同乗したものと考えられているが、志度と高松へ上陸するためにはそれぞれの地へ渡船があったことを推測させる。稲田本と東北大本（狩野文庫）もこの点が違い、東北大本では上陸地が丸亀のみになっている。また大阪で遍路が情報を得に訪ねる場所が稲田本では北堀江一丁目田嶋屋伝兵衛であるのに東北大本では立売堀丸亀屋又右衛門同籐右衛門かたとなる。遍路の旅に関係する地名と人名が入れ替えられている。出版地に近い大坂の人名であるためにその時点で最も正しい情報に変更する必要があったと考えられる。またこのことは両者の出版時の新旧の判定につながる問題と考えている。

10 では船賃が白銀貳匁と銀貳匁と違っている。白銀の方が高価であるらしいが、その当時の価値の違いはよくわからない。

④ ご詠歌

現代の私たち遍路が寺院でのお祈りは、般若心経を口で唱えて行う納経が多いが、眞念が「四国遍路道指南」で勧めているのは、光明真言、大師の宝号にて回向したのち、寺のご詠歌を3回唱えることである。ご詠歌を強く推奨しているのは眞念の大きな特徴である。表1のうち、ご詠歌に関してひらがなや漢字などの文字の表記法も含めて赤木文庫本と稲田本の間ではご詠歌に相違点が多い。

17, 27, 36, 57, 74, 78, 91, 98, 100, 108, 125, 126, の12ヶ所に違いが見られる。ご詠歌の大意が変えられたわけではないが、この違いには歌を推敲する過程にあるような言葉遣いの逡巡を感じる。この本の執筆に関わった眞念、洪沢の誰かがこのご詠歌を推敲している過程を想像する。このことを翻って考えればご詠歌は眞念以前の巡礼者の記録には出てこないように観察している。さらに想像をたくましくすると、この本の制作過程において、ご詠歌が整備された（もしくは作られた）のではないかとも考えられるが、このことについては推測の域を出ない。そして自分が作ったのであれば他に気兼ねなくここまで大きく変更ができるような気がすとも考える。

⑤ 遍路に宿かす人

貞享四年以前に遍路を行った澄禅の「四国遍路日記」には、「後生願いのために宿かす」という記述で遍路に宿を貸す人が登場するが、「四国遍路道指南」では「遍路をいたわり宿かす」という表現に変わる。自分の死後の安泰を願って遍路に宿を貸すという気持ちが、遍路のために援助をしたいという、現代の「お接待」の気持ちに近づいているようにも考えられる。表1の7の記述には、後に言われる「接待」として遍路に宿を貸す精神と共通する気持ちがある。眞念が「こころざしの」人に、遍路に宿を貸すようにすすめたことは稲田本にお

いて初出であると思われる。想像をたくましくすれば、四国遍路の特徴の一つであるお接待の精神は眞念のこの記述が始まりの一つのようにも考えられる。この時代に庶民の遍路が盛んになり、宿のないところに泊まることが必要な事態が生じたと考える。この動きに眞念は遍路の宿の手配に大いに心を配ったと思われる。

赤木文庫本に比べて稲田本の方が、宿を貸す人名が増えている。66, 83, 93, 94, 95, 97, 105, 109, 114, 119, 120, の記述において、具体的な人名が書き加えられている。赤木文庫本出版の後に稲田本までの間に眞念が四国において遍路に宿を貸す人を新たに開拓して書き加えたのではないかと考えている。これも四国遍路に出かける人が庶民の間に広まっていき、彼らの宿泊する宿が解決すべき大きな問題となっていたのではなかろうか。

67番に邊路屋有という記述が現れる。眞念は赤木文庫本の出版の折から、阿弥陀堂、観音堂、地藏堂などのある場所を丁寧に記述している。稲田本になって堂の名前が増えるところはあまりないが、新しい邊路屋という記述は遍路が宿泊できる場所が新設されたことを想像させる。この久万町の邊路屋が現在どうなっているのであろうかという点には興味をひかれる。

⑥ 地名の相違について

地名の表記の違いは随所にある。表1の47は清瀧寺の場所の記述であるが、赤木文庫本が幡多郡、稲田本が高岡郡であるが、高岡郡が正しい。122は屋島寺の在所であるが、稲田本では山田郡が八幡郡となり誤っている。また123は八栗寺までの道順の記述であるが、稲田本では八栗寺が薬師寺になっている。歩いている遍路にとっては道を誤る基本的な地名の間違いである。新しく出版されたから、全て正しくなっているとは言えないようである。これらの点は江戸時代の本を新しく改版する過程で生じる問題と連動しているようである。

7 おわりに

2冊の本を比べて、近藤喜博氏のいわれるように8行本（稲田本）は6行本

(赤木文庫本)の省略本という表現は当たらないと考える。6行を8行に変えることにより、本の厚さは薄くて持ち運び易くなり、書かれている内容においては巡礼に必要な知識は省略されず、より実践的なガイドブックを目指した出版物に、作り替えたいという意思の働いた本ではないかと考えている。遍路の雰囲気伝える挿絵とか、例えば壇ノ浦の佐藤次信の墓の説明など巡礼の途中で見聞する歴史情報などが省かれた。一方、四国遍路に宿を貸してくれる人の名数は増やされた。また月山神社への行き方は詳しく丁寧になった、などの変更点をあげることができる。より実際の四国遍路の巡礼に必要な知識を掲載するよう改訂がなされている。この8行本「四国徧禮道指南」の作成には「四国邊路道指南」を作成した眞念と洪卓の意識、更に学問僧寂本の考えが及んでいるように考える。筆者は8行本「四国徧禮道指南」の成立には、遍路の巡礼のために更にいいものにしたい、また仏教の思想に従いたいという、眞念たちの配慮が働いているように想像している。「四国邊路道指南」の著者眞念がこの2冊の出版に関わり原稿の作成に関わっていると想定している。この2冊の記述のゆれは最初期に四国遍路を確立しようとした人の心のゆれを示しているように考えている。この後「四国徧禮道指南増補大成」という形でガイドブックの出版が繰り返される。最初の刊記のある「増補大成」が出版されるのが、明和四年(1767)年であるから、貞享四年から80年余経過している。元禄二年の時代に、すでに眞念は20数回四国遍路をしていると書いているので、明和四年版は別の人の編集による出版と考えている。この2冊の本の記述のゆれが眞念たちの時代の四国遍路の直面する解決すべき問題の一端を示していると考えられる。

筆者は古文書読解に関して初学者であるため、読み間違いがあることを恐れながら本論文を書いております。この論文を書くことに適切なアドバイスをいただきました渡邊達夫さんにお礼を申し上げます。また早稲田大学本を紹介していただいた香川大学大学院生富田博子さんにもお礼を申し上げます。この論文の骨子は平成23年度山岳修験学会学術大会で発表いたしました。

参 考 文 献

近藤喜博（1974）「四国霊場記集別冊」勉誠社 534 p

伊予史談会（1981）「四国遍路記集」伊予史談会編集発行 325 p

喜代吉榮徳（2007）「『四国徧禮道指南増補大成』本について」『善通寺教学振興会紀要第13号』善通寺教学振興会 18-39 p